

企画展

岡山城下の豪商
河本家の絵画



2025

表紙の画像…虎図（部分） 川端玉章（画、賛） 文久三年（一八六三）
裏表紙の画像…河本立軒像（部分） 大野文泉（画） 寛政二年（一八〇二）

岡山市立中央図書館 企画展

岡山城下の豪商

河本家の絵画

展示

会期 二〇二五（令和七）年五月一五日（木）～七月六日（日）

毎週月曜日休館

会場 岡山市立中央図書館 二階視聴覚ホール前 展示コーナー

観覧無料

関連行事 歴史講座「河本家伝来の絵画資料について」

日時 二〇二五（令和七）年五月一七日（土） 一四～一六時

会場 岡山市立中央図書館 視聴覚ホール

定員 六〇名（当日先着順、聴講無料）

講師 飯島章仁（岡山市立中央図書館 主査学芸員）

河本家の人々とその遺産

江戸時代の岡山城下で広く活動した豪商のうち、灰屋河本家は、蓄えた富を天下国家のためとして貴重な書籍や美術品の収集に注ぎ、京都の公家や学者と交際して高い文化の香気を岡山へもたらしたことで広く知られています。

河本家の収集品の多くは第二次大戦の直後までにさまざまな経緯を経て散逸しましたが、なお多くの資料が昭和三四年に当主の河本太仁治氏から当館へ寄付されており、同じく戦後に東京国立博物館の所蔵となつて国宝に指定された鎌倉時代の絵巻「餓鬼草紙」（河本家本）とともに、かつての繁栄を今に伝えています。

河本家の人々は書館、経誼書院を設立して万巻に及ぶ貴重な書物を人々の利用に供するとともに、第六代の当主の立軒は、父の侗居（一阿居士）が志した城下の市民のための郷学の設置を実現させて、自身が教壇に立つて漢学を講義したとも伝わっており、所蔵する資料と学識を惜しみなく市民へ開放しました。

近代になつても河本家では、キリスト教に入信して石井十次らとともに数々の社会事業に取り組んだ乙五郎氏と、時代の先端を行く画家たちを積極的に支援した太仁治氏の父子の生き方からうかがえるように、名望家として社会への貢献を続けて来ました。

そこでこのたびは、①河本家の歴代の当主の肖像画と、②河本家の人々が収集した作品、および③本格的に画技を学んだ河本家の人々の作品を展示し、絵画作品を中心にして河本家の事業を紹介することにしました。

一 河本家の歴代当主

明治初期に当主の又七郎（黙軒）が岡山藩へ提出した奉公書によると、河本家の祖先は浮田氏であり、池田氏が岡山城主になった江戸時代に城下へ出て商人となつたといい、城下の船着町（現在の岡山市北区京橋町）に本邸を構えていました。

宝暦年間の当主、河本勝平（一居）は、松前から博多までの全国にわたる交易網を築き、事業を岡山城下で有数の規模に発展させたといえます。

勝平の甥で養子となった河本質（巢居）は、河本家では初めて岡山城下の町人社会を代表する惣年寄の役に就きましたが、各地で貴重な書物を収集し、万巻に及ぶ河本家の蔵書の基礎を作つて、これを納める経誼書院を設立しました。そして以後、河本家の歴代の当主は岡山城下の惣年寄に任ぜられ、武家の町奉行のもとで城下の市政を取り仕切ってきました。

巢居の子の河本安（侗居、一阿居士）は茶道、和歌、俳諧に造詣が深く、そのことを通して全国の多くの文化人と交流を持ちましたが、晩年は禅に傾倒し、備中国の宝福寺に入山しました。

侗居の子の儼（立軒）は、父が志した城下の町人の子弟のための教育機関設置事業を継承し、藩から経誼書院を郷学とする認可を得ました。彼は漢学に深い素養をもっており、経誼書院で中国風の服装をして、みづから市民に漢籍を講義したと伝わっています。

そして彼が残したさまざまな書物から判断すると、香道、茶道、花道などの芸能や座敷飾りについてよく学び、雅楽についても深い学識を得ていました。こうしたことは上層町人としての交際の必要から理解することもできますが、資料を通じて立軒の関心の深さを目の当たりにすると、学問への傾倒はもつと真摯な動機から出ているように思われます。

二 京都で学んだ河本家の人々

立軒の長子の会（公輔）は学問への志が止みがたく、『平安人物志』にも三宅姓で名前が出ているとおり、京都へ出て上賀茂神社の神官で国学者として知られる賀茂季鷹に師事し、国学や和歌を研究して著作も残しました。そのため河本家の当主は弟の曾（訃軒）が嗣ぎましたが、彼も惣年寄を務める多忙の中で和歌や書に親しみました。

公輔の長子の文介（延之）も京都にとどまって歌道を研究したので、その弟の容軒が岡山で当主と惣年寄などの役を引き継ぎましたが、彼は琴洲と号して京都の画家、中島来章から本格的に画業を学びました。そのため同門の画家の川端玉章が幕末の文久年間に岡山の琴洲を訪ねたとき、市内で初めて公開されていた虎を実写した作品が河本家に伝わってきました。

京都で生涯を過ごした公輔と延之の父子は、岡山の本家とのつながりを絶やさず、むしろ都の人士と交わることで多くの情報をもたらし、河本家が堂上の人々と深い関係を結ぶのに役割を果たしました。

三 収集家としての河本家

城下の商人は藩の求めに応じて多額の献金を行ない、たびたびその財政難を救ってきたほかに、名望家として文化事業や社会事業にも貢献しました。岡山の豪商の中ではとりわけ河本家が文化面で顕著な活動をしており、立軒の頃には書籍のほかにも古銅器や古鏡、楽器などを多数所蔵していました。

江戸幕府で寛政の改革を推進した松平定信は、幕閣を退いた頃から全国の古器物の調査に力を入れるようになり、現代風に言えば文化財図録に該当するような大部の書物『集古十種』を編纂させますが、その中に立軒の所蔵品も収録されています。

河本家の歴代の当主の肖像画の中で、立軒のものは独特で異彩を放っています。これは定信の側近を務めた画家、谷文晁の高弟の大野文泉が『集古十種』の調査のために中国地方を旅行した寛政一二年に、立軒の所蔵品を実見するために岡山へ立ち寄ったとき描かれたものです。これの「対写」とある注記は、立軒を実際に目の前にして直接写生したことを表しており、それは描写の内容もうかがわれ、生前の立軒の風貌を彷彿させる貴重な作品であるといえます。

かつて河本家は鎌倉時代の絵巻物「餓鬼草紙」の所蔵者として知られていました。仏教の六道輪廻の思想を表したこの絵巻は、都の貴族の邸宅に始まり、平安京の

市街を経て、荒涼とした葬地へと情景が続いて行く中に、餓鬼が憐れむべき姿で彷徨するさまが描かれています。こうした内容が、河本家の家訓や気風とどのように関係しあうのか、大変興味がもたれるところですが、国宝に指定されているこの絵巻は終戦後の厳しい経済事情の中でやむなく河本家のもとを離れることになり、現在は東京国立博物館の所蔵になっています。

四 河本家の遺産

河本家の繁栄がしのばれる資料で現存するものは、先の「餓鬼草紙」を除けば多くが当館の所蔵になっています。それは昭和三四年における当時の当主、太仁治氏からの寄贈に始まって、昭和五五年には郷土史家の岡長平氏の旧蔵品が遺族の石村雅子氏から、昭和五九年には河本家の親族の那須衛一氏から、平成一七年には宗政省作氏から、それぞれ資料の寄贈があり、「経誼書院」の看板は橋本修一郎氏を通じて当館へもたらされました。また、光田健輔氏の旧蔵品にも長島愛生園の慰問を通じて深い親交のあった太仁治氏からか、若干の河本家関係資料が含まれています。

このうち河本太仁治氏からの寄贈品の大部分と「経誼書院」の看板は岡山市の指定重要文化財になっており、比較的よく紹介もされてきましたが、このたびは那須衛一氏の寄贈品と岡長平氏の旧蔵品から未紹介の資料をいくつか展示しました。岡長平氏は河本家の本邸があつた船着町で代々砂糖問屋を営んできた岡屋の子孫であり、河本家とは数世代にわたって交際があつた間柄です。

なお、河本家の歴代の当主の伝記は、河本勝平（一阿）の日記を河本公輔が抄録した『家録秘抄』を除けば、同時代の記録がほとんど残っていません。そこでこの展示でも、昭和八年刊行の『備前岡山人名彙海』や、戦前・戦後の岡山市史、および各種の人物事典の記載内容に加えて、河本乙五郎氏からの聞き取りをもとに執筆されたという岡長平氏の論説「河本一阿と立軒」（『古美術』誌に掲載）などに依拠しています（巻末の参考文献一覧を参照）。

河本定平像 画家不詳、雲卧（賛）

河本家第二代・定平の肖像画です。賛文に記されている内容と、木箱の蓋の書付から、曾孫の安（号・侗居、一阿居士）が作成したものとなります。したがって生前の本人の実写ではなく、後代に追懐して描かれたものです。

仏教へ深く帰依した定平は、晩年になって高野山へ上り、龍澄と号して禅・密の二宗を修めたといわれ、椅子に座る高僧の姿で表わされています。

賛の文を寄せている雲卧という人については、この時代に活動していた複数の人物が浮かびますが、篆書の印記がよく解読できていないので、特定には至っていません。

おお、一般に肖像画の顔の向く先を憚つてのことだと言われますが、この賛の文は左端の行から読み始めて右へと進んで行きます。

縦一〇・一cm×横三五・六cm。河本太仁治氏寄贈品。

賛（左端の行から右へ読みます）

雲卧老衲書（印記）（印記）

禪密相兼輪並馳

忽亡包拋塵事修眞理

國君褒孝世皆知

五典三墳自幼兒

眞俄求讚

又稱龍澄共探其源云曾孫一阿居士圖其

剎染參禪於難波政各寂源學密於野山

國君褒之有恩賜事迹詳孝子傳後信佛法

河本定平幼誦詩書呼為神童事父母至孝

河本定平は幼にして詩書を誦し、神童と呼ばしめて、父母に至孝をつかえ、国君

はこれを褒めて恩賜あり、事迹は孝子伝に詳なり。後に仏法を信じて剎染し、難

波に於いて政各寂源に参禅し、野山（高

野山）に於いて密を学ぶ。また龍澄と称

して共にその源を探ると云へり。曾孫一

阿居士その眞を図し俄に讚を求む。

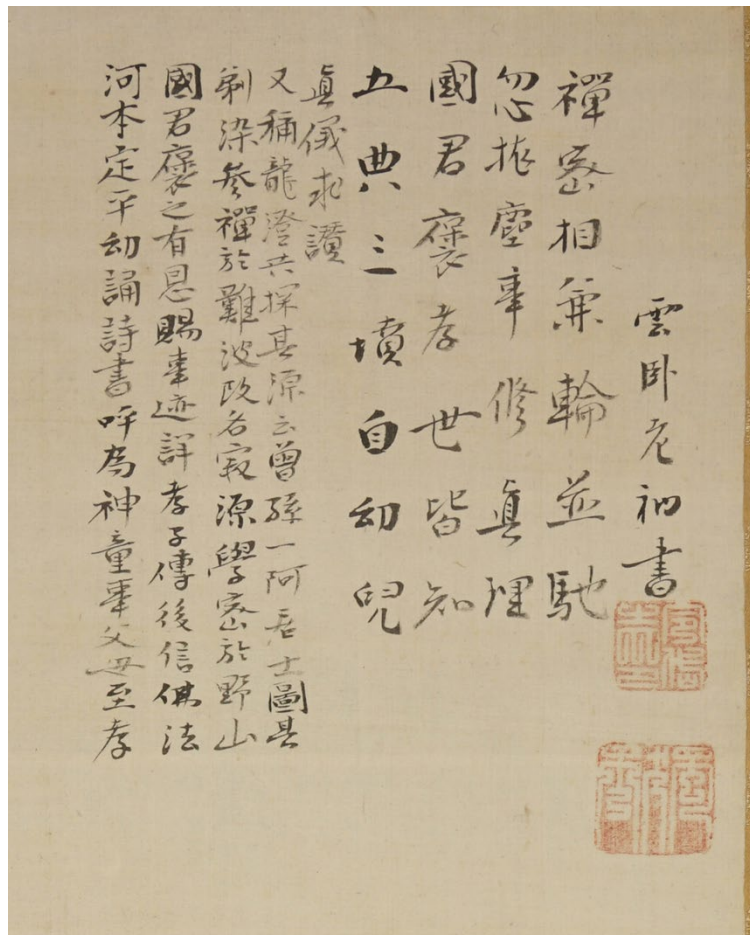
五典三墳は幼兒より。国君は孝を褒め世

は皆知る。たちまち包を亡じて塵事を抛

ち、眞理を修す。禅密あい兼ね輪は並び

馳せる。雲卧老衲書。

馳せる。雲卧老衲書。



賛



木箱

雲卧元初書
 禪密相兼 翰並馳
 忽拖塵事 修真理
 國君廢孝 世皆知
 九典三墳 自初兒
 真儀和護
 又稱龍登共探其源三曾孫一阿居十國是
 刺深衣權於難過改名寂源學於野山
 國君廢之有恩賜建述評孝子傳後信佛法
 河本定平知誦詩書呼為神童年父一五存



河本一居像 画家不詳、天倪惠謙（賛）、寛政二年（一七九〇）

二枚残っている一居の肖像画のうち、こちらには周防国の天倪惠謙という僧が賛を記しています。それによると、これは延享四年（一七四七）に数え年八八歳で亡くなつた一居の肖像を、孫の安（侗居、一阿居士）が画工に命じて描かせたものです。

商売のことについては大変厳しい一面をもっていたと伝わる一居ですが、この賛文の中では温厚な性格で、父母へ孝養を尽くしたという人柄が称えられています。そうした複雑な性格が、想いにふけり、何か夢見るかのような視線の中に宿されています。

この賛文に記されている年記「寛政庚戌」は寛政二年（一七九〇）のことです。この年に侗居は数え年で六三歳になっています。

頭頂部と後頭部と向かって左の頬に輪郭線を変更した痕跡があります。

縦一〇・三・四cm×横三・六・七cm。河本太仁治氏寄贈品。

賛（左端の行から右へ読みます）

寛政庚戌林鐘日 周州香山退衲天倪惠謙題書（印記）「天倪」□□

精修阿字 理會真空 縣々瓜瓞 嘉運無窮

仁慈純孝 萬福攸同 信以歸佛 義以奉公

傀偉竒骨 國都財雄 脩學衣德 興家旌功

需予讚語以不文辭不可謾俚語塗糊焉

十日壽八十八卒孝孫一阿居士命工描翁之肖像

利民是以顯聲于世矣翁其後裔也延享丁卯六月

稱對馬守擢于老臣肅々謹候度也以忠奉君以仁

既載備府之孝子傳也其先仕宇喜田侯翁之高祖父

行家貨殖昌時也孝廉事父母仁恕惠九族矣其孝

志尚清雅老來剃髮入道其為人也温厚質直恭儉

老翁姓河本名勝平字又七郎別號一居少小好字

（印記）



寬政庚戌林鐘日 周州香山退社天倪惠謙題書

精修阿字 理會真空 縣々凡猷 嘉運無窮

仁慈純孝 萬福攸同 信以歸佛 義以奉公

魄偉奇骨 國都財雄 脩學衣德 興家旌切

需予讚語以不文辭不可謾綴俚語塗糊焉

十日壽八十八卒孝孫一阿居士命工描翁之肖像
利氏是以顯聲于世矣翁其後裔也延享丁卯六月
稱對馬守擢于老臣肅々謹候度也以忠奉君以仁
既載備府之孝子傳也其先仕宇喜田候翁之高祖父
行家貨殖昌時也孝廉事父母仁恕惠九族矣其孝
志尚清雅老來剃髮入道其為人也溫厚質直恭儉
老翁姓河本名勝平字又七郎別號一居少小好學



河本一居像 画家不詳

定平の子、河本家第三代・勝平（号・一居、隨時庵）の肖像画です。彼るとき、河本家は交易の範囲を広げ、蝦夷地の松前から九州の博多まで全国にわたる取引網を築いたと伝わり、書物の収集も本格的になります。

先の肖像画と比べると、こちらのほうではまなざしや口元の表情がより鋭く引き締まり強調されて表されているので、河本家の巨富の基礎を築いた人を彷彿させる、意思の強そうな風貌に描かれています。こうした特徴から、こちらの肖像画に初発性を見るか、あるいはこれを模写にともなう表現の強調とみるかで、二つの肖像画の前後関係を考える際には判断が異なってきます。

なお、一居の甥で、親類の天野家から実子のない一居のもとへ養子入りし、貴重な書物の収集を継承して、経誼書院という書館を設けた河本家第四代・質（巢居）の肖像画と判明するものは、当館には伝わっていません。

縦一〇一・一cm×横三五・六cm。河本太仁治氏寄贈品。

木箱と巻紙

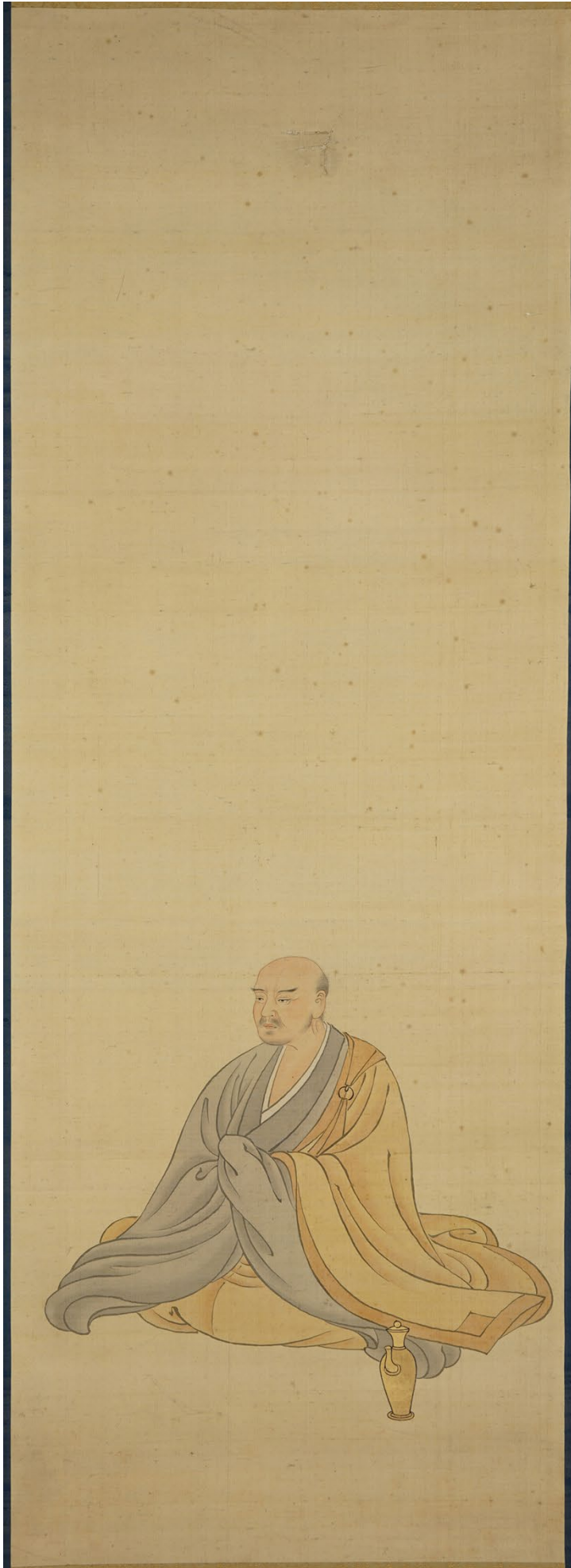


部分



(伝) 河本侗居像

画家不詳



この画は河本家第五代・安(号…侗居、一阿居士)の肖像とされてきましたが、賛やそれに類する直接の書入れがなく、人物の同定には決め手を欠いています。

そこで、この画の表装に用いられている紺色の裂地と黒色の木製軸先を見ると、前掲の祖父・一居の賛がないほうの肖像画と同一です。そのため両者が同時期(寛政二年)に制作され、揃いの表装をなされたと考えた場合、この肖像は、そのときには数え年で六三歳に達していたはずの侗居にしては少し年齢が若いように見えます。しかし表装は後代に作り直される可能性もあり、これも確かな論拠にはなりません。

侗居は茶道、和歌、俳諧に造詣が深く、画家の浦上玉堂などさまざまな文人と親交を結びましたが、城下の町人のために志した郷学設置は藩の認可がなかなか下りず果たせませんでした。晩年は禅宗に皈依して出家し、宝福寺(総社市)へ入山しました。

縦九九・二cm×横三五・五cm。河本太仁治氏寄贈品。

千利休像

画家不詳、河本侗居（賛） 寛政六年（一七九四）

木箱の蓋表

先祖考讃東洋画利休居士

茶人の崇敬を集めた千利休の肖像画です。描いた画家の名前は印章がつぶれて不鮮明であるため判明しませんが、「外に鴻漸の事を倣い、内に趙州の茶を参ずる、万古の規則立つ、何人も歯牙に容れん」という内容の賛は六七歳の河本侗居（安、一阿居士）が記したもので、寛政六年（一七九四）に該当します。茶道に深く傾倒した侗居は自宅に藏身庵という専用の茶室を設け、茶を通じて広い交友関係をもっていました。縦九九・〇cm×横三三・九cm。那須衛一氏寄贈品。

賛（左端の行から右へ読みます）

六十七翁安拝賛（印記）「河本安印」（印記）「定夫」

立何人容齒牙

趙州茶参萬古規則

外倣鴻漸事内参

立何人容齒牙
趙州茶萬古規則
外倣鴻漸事内参

六十七翁安拝賛



河本立軒像 大野文泉（画） 寛政一二年（一八〇二）

河本家第六代・儼（号、立軒）の肖像画です。これを描いた大野（または巨野）文泉は白河藩士の子に生まれ、幕府老中の首座として寛政の改革を推進した白河藩主、松平定信に画才を見出され、彼の側近を務めた画家、谷文晁の高弟となった人です。

立軒のこの肖像画は、画中に寛政庚申（寛政一二年、一八〇二）の年記があり、文泉が数え年で二九歳であった年の作品とわかります。その前年とこの年に彼は松平定信が取り組んだ『集古十種』の編纂のために西日本を旅行したことが明らかにされており、この肖像画はそのときに文泉が岡山にも立ち寄って立軒が所蔵する古美術品を

調査した際に描かれたものと考えられ、画中に特に「対写」と注記されていることから、画家が立軒本人を眼前にして直接写生したことがわかる貴重な作品です。

当館には京都の画家、余田正胤（如水）が、この左右を反転させて模写した作品（那須衛一氏寄贈品。今回は展示せず）もあるので比較すると、文泉の作品には、至近距離にいる画家を見つめているために片方の目だけが相手へ焦点を合わせている点や、衣服の襷と帯の結び目の正確な描写、両肩のあたりの衣の下に想像される体躯の膨らみの素直な表現など、本人を前にする実写ならではの特徴が顕著に認められます。父の遺志を継いで経誼書院を郷学とする認可を藩から取得し、中国風の衣服を着て漢籍を講じたと伝わる立軒の、数え年で五四歳のときの風貌が如実に表されています。

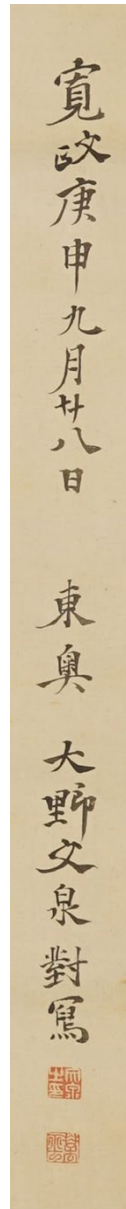
縦一五七・〇cm×横五六・五cm。河本太仁治氏寄贈品。



大野文泉の原作（右）と余田正胤の模作（左）を比べると、模作では両目の眼球の向きが揃い、眉毛を反らせて強調し、帽子の立体感はむしろ乏しく、頬の表情に少し誇張が出ています。また全身をみると、衣の襷の表現や首筋から肩へかけての体軀の膨らみにも自然さが少なくなっています。文泉の肖像画が本人を前にしての写生であることが納得されます。



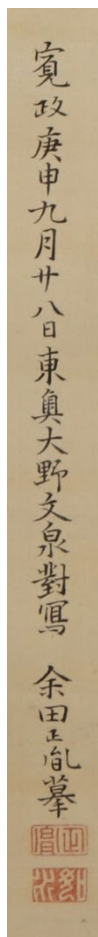
大野文泉による、「対写」を明記した河本立軒像の落款（署名）と印記。



余田正胤による大野文泉の立軒像の模作。ほぼ同寸ですが左右が反転になっています。那須衛一氏寄贈品。



右の作品の左下隅に記されている余田正胤の落款（署名）と印記。



余田正胤（如水）の作品の木箱の蓋裏には文泉の作品を文化六年に模写したことが記され、寿像として扱われてきたこともわかります。

顕考寿像 文泉対写如水模文化六年己巳三月先子之所賜也 不肖男公遠謹藏（印記）「子孫仁保」



藤樹先生像 土佐光貞（画） 寛政七年（一七九五）

これは大和絵系の絵師で、朝廷の「絵所預」を代々務めた土佐派の画家、藤原光貞（土佐光貞）による、近江国の儒学者・中江藤樹の肖像画です。光貞は天明年間に火災で焼失した京都御所が松平定信の尽力で寛政二年（一七九〇）に再建されたとき、御用絵師の一人に選任され、多数の画家を統率して建物の装飾画を取り仕切りました。

この絵を収納する木箱の蓋の表側には「藤樹先生肖像 立軒收藏」と書かれ、裏側には河本立軒（三宅儼）が寛政七年（一七九五）一〇月に識語（来歴を記した言葉）を記しています。それによると、京都の葎屋町にあった星辰を祀る姿の藤樹像を、天明七年（一七八七）夏に立軒が祭主の洵良蔵に許可を乞い、光貞に描かせて自家に收藏したものとわかります。

藤樹の肖像画があつたのは京都西陣葎屋町（現在の上記区葎屋町通元誓願寺下ル徳屋町）の京都学館で、これは仙台出身の儒学者で、後に会津に藤樹学派を育てる洵岡山が、藤樹の没後、京都でその学問を継承するため延宝二年（一六七四）に臼杵城主、稲葉景通の屋敷地を買い取り、藤樹を祀る祠堂と学館を建設して、子孫が代々管理にあたってきたものです。

藤樹は陽明学派の儒者で、岡山藩の実質的な藩祖となる池田光政が深く敬慕し、その弟子の熊沢蕃山を岡山に迎えて藩政の改革に当たさせたことは広く知られていますが、そのことは立軒も意識していたに違いありません。

祭主の許可を得て画家に制作を依頼してから作品が完成して收藏されるまでに長い年月が経過していますが、御所が焼亡した天明八年（一七八八）正月の大火で洵岡山の京都学館も類焼しており、さらに土佐光貞は寛政二年（一七九〇）には御所の装飾画に、そして寛政五年（一七九三）にも光格天皇の皇后の

御殿の造営に携わるので、そうした諸事情が制作の延引の原因になった可能性を考えられそうです。

縦一〇三・九cm×横四〇・一cm。那須衛一氏寄贈品。

木箱の書き付け

（蓋表）

藤樹先生肖像

立軒收藏

（蓋裏）

中江先生祭星之像藏在京師葎屋町祠堂天明丁未夏乞

諸祭主洵良蔵令藤原光貞摸之而蔵家

寛政七年乙卯十月

三宅儼識（印記）「儼」「恭」

（印記）「備前河本子恭家蔵記」

画中の署名

画所預正五位下土佐守藤原光貞（印記）「光貞之印」

木箱の蓋の表と裏





畫所預正五位下左字藤原光貞



聖像 (伝) 溆上旭江 (画)、賀茂保考 (賛)



中国の北宋の画家、李龍眠（李公麟）の画を原作とする聖像（孔子像）です。

作品自体に作者の署名や作者を特定できる書付はありませんが、この作品の旧蔵者である岡長平氏（郷土史家）の所蔵品を公開する展覧会（「岡長平先生還暦祝賀展覧会」昭和二十六年、天満屋百貨店）が開催されたときの解題目録に、この作品が、児島郡出身の画家で「山水奇観」を代表作とする溆上旭江の画に、空海（弘法大師）の筆法をよく研究し書博士の称を得た京都の書家、賀茂保考が賛を記したものととして記載されています。

京都御所で使用される重要な調度品に筆をふるった賀茂保考は、その時代に随一の評判をとった書家で、河本立軒に「経誼堂」の書を贈った一条忠良（内大臣、のちに関白）の書道の師であり、享和三年（一八〇三）には立軒のために自身が「経誼書院」の看板の文字を書いています。

この作品でも流麗な筆致に保考の「大師流」の特徴が強く現れています。

縦八七・〇cm×横五四・二cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。

聖像 河本立軒（画）、河本公輔（賛）



この作品は、淵上旭江が描いたとされる李龍眠の原作に基づく聖像（孔子像）を、おそろくさらに模写したもので、河本立軒（署名は三宅儼）が肖像画を描き、中国・西晋の文学者、晋陸機の詩文を、子の公輔（署名は三宅会）が賛として書き入れたことが、それぞれの署名で示されています。

この合作からは、儒学や中国の古典に対する父子の共通の関心がうかがわれるとともに、専門の画家であった旭江の域には及ばないとしても、河本家の二人が、画や書において素人の域を超えた、なかなかの技量を有していたことがうかがわれます。

縦七九・五cm×横四六・二cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。

(伝) 河本公輔像

画家不詳



軸の外装



立軒の長子で、京都へ出て国学者の賀茂季鷹に師事し、国学と歌学を学んだ会(公輔、通称・文太郎)の肖像とされてきたものです。軸の外装にある「公輔御省像」という書き入れは、その表記のしかたから、かなり古いもの(江戸時代?)と考えられるので、そのまま信じてよさそうに思われますが、厳密に言えば贅が記されておらず、肖像に関する直接の記載もないので、人物の同定にはなお余地があると思われるべきでしょう。公輔は故郷で商人として歩む代わりに京都へとどまって高名な人物と交わり、学者としていくつか著書も残しました。文化や学問を大切にした父の立軒とは、「聖像」の共同制作からもうかがわれるように良好な間柄にあったようです。むしろ彼は、河本家が京都の堂上の人々と関係を持つために大きい役割を果たしたようです。

縦一〇一・六cm×横三五・六cm。河本太仁治氏寄贈品。

(伝) 河本訥軒像

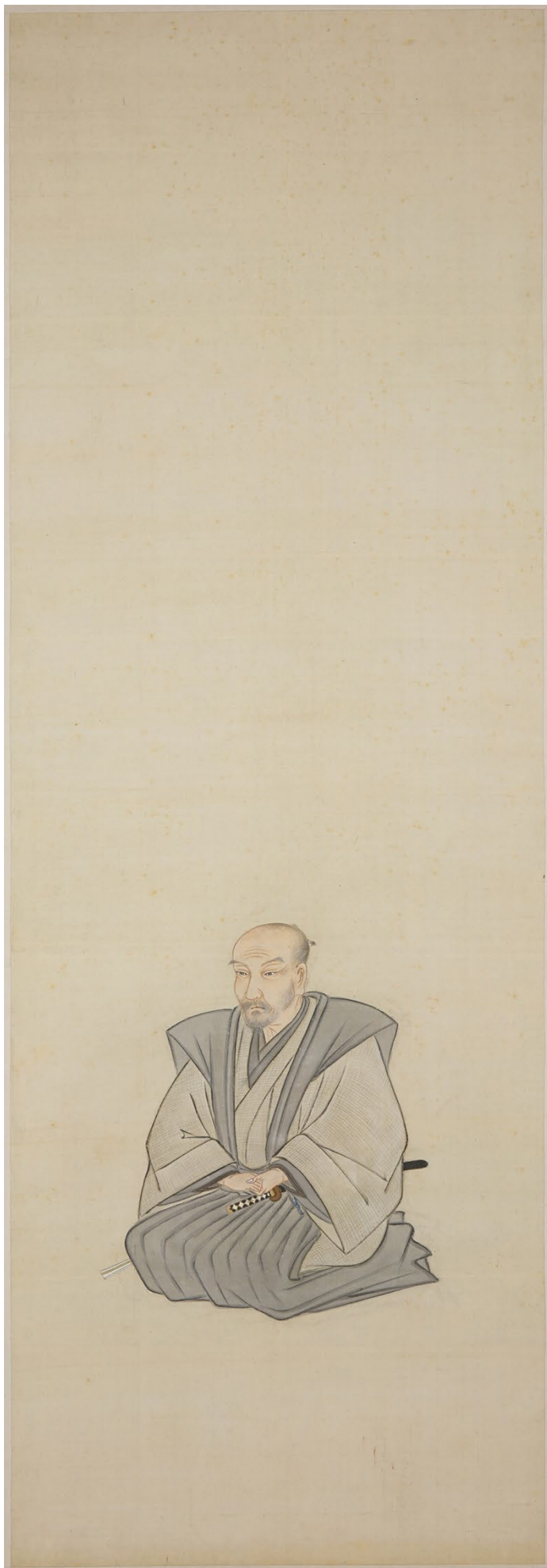
画家不詳

軸の外装



公輔の弟で、岡山で河本家第七代を継いだ曾（公唯、通称・忠五郎、号・訥軒）の肖像画と伝わるものですが、これも賛などがなく、外装への書入れからの同定です。しかし訥軒は天保十三年（一八四二）に数え年五九歳で歿しており、かりに最晩年の肖像としても、家紋のない地味な色調の袴を着た白髪交じりの風貌は、やや年齢が高くも見えます。また、江戸時代後期には岡山四條派の画家や谷文晁の一派がそれぞれの方法で写実性を追求してその影響が広まりますが、公輔と訥軒の肖像は伝伺居像や大野文泉の立軒像と比べても描き方が古風に見え、もしも疑うなら肖像の伝わっていない第四代の巢居のような、少し早い時期の当主の可能性も一概に否定し得ません。訥軒は惣年寄などの市政の役も務めました、その中でも兄から国学を学び、和歌や書に親しました。また、岡山藩へ多数の貴重な書物を献上しています。

縦一〇三・一cm×横三五・五cm。河本太仁治氏寄贈品。



虎図 川端玉章（画）

天保一三年（一八四二）に京都の蒔絵師の家に生まれた川端玉章は、円山派の画家、中島来章に師事しました。慶応二年（一八六六）には江戸へ出て狩野派の絵師に入門し、さらに油絵の技法も学びましたが、その後、円山派の伝統へ戻り、以降の画壇では日本画の中心人物として活躍します。明治二〇年に東京美術学校（現在の東京芸術大学）が設立されると最初の教授に就任し、さらに明治四〇年にはみずから川端画学校を設立して多数の後進を育て、大正二年（一九一三）に歿しました。

河本容軒（琴洲）も中島来章を岡山に招いて画技を学んだので、玉章とは同門になります。

この作品の旧蔵者の岡長平氏は、これを次に掲出した文久三年の自賛のある「虎図」の下図と考えましたが、直接の共通点は少なく、こちらのほうは虎を旧来の伝統的な構図に沿って描いている面が強いようにみえます。しかし毛並みや顔の表情には観察に基づくかと思われる写実的な要素もみられます。

縦一三七・〇cm×横七五・六cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。



虎図 川端玉章（画、賛） 文久三年（一八六三）

川端玉章が岡山へ来て描いた虎の図としては、こちらが広く知られている作品です。文久三年（一八六三）には虎が岡山へ連れてこられ、城下の末山町にある大隣寺で公開されて話題になりました。これは船着町にあった河本家の本邸から、直線距離でなら南西へ四〇〇メートルほどのところでした。玉章はちょうどこの機会に來台させており、生きた本物の虎を眼前にして行つた実写に基づき、この作品は制作されました。

画面の左上に記された玉章の自賛には、「文久癸亥の初夏に岡山へ旅したとき、於兎（虎の異名）が来て開場したところへ予（私）も到来し観たので、その真を写し、賞して抱陽楼主人（琴洲か？）の求めに応じた」というような内容が書かれています。この年の玉章は数え年でまだ二三歳の若さでしたが、かえってそうだからこそというべきか、細部まで緊張感が途切れることなく丁寧に描き込んでおり、澁刺とした作品に仕上げています。

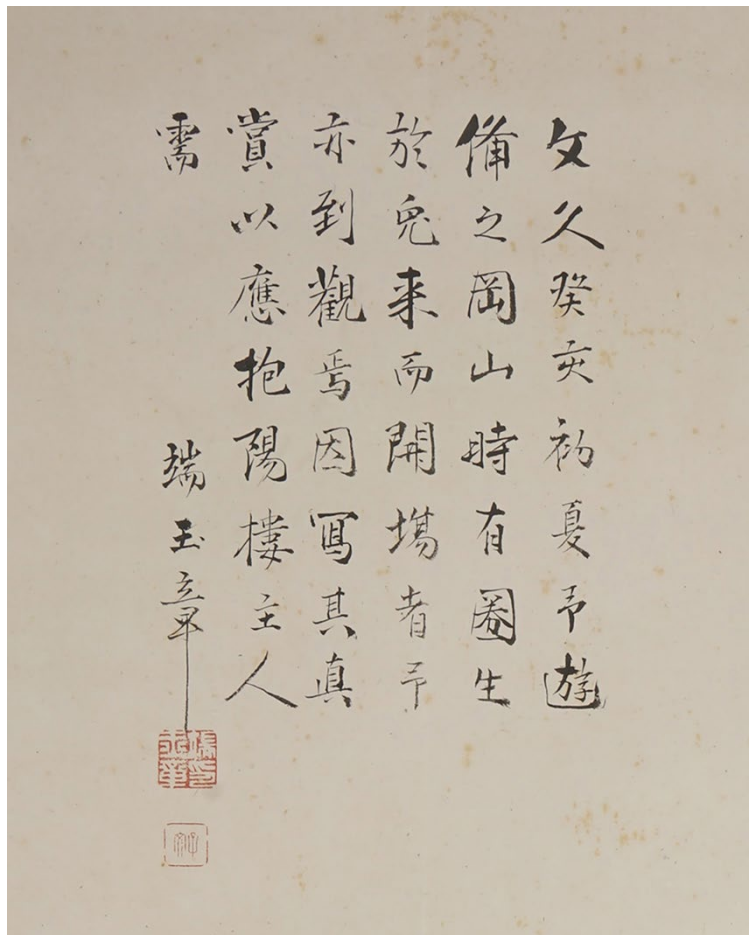
縦一三六・八cm×横八二・三cm。河本太仁治氏寄贈品。

自賛

文久癸亥初夏予遊
備之岡山時有圈生
於兎来而開場者予
亦到觀焉因寫其真
賞以應抱陽楼主人
需 端玉章（印記）「端玉章印」「子文」

文久癸亥初夏、予、備
の岡山へ遊ぶ。時に圈生あり、
於兎来たりて開場すれば、予
また到りて観る。因りてその真を写し
賞して以て抱陽楼主人の需めに応ず。

（川）端玉章



賛

文久癸亥初夏予遊
 備之岡山時有園生
 於兔來而開場者予
 亦到觀焉因寫其真
 賞以應抱陽樓主人
 需

瑞玉



机上俄眠の図 河本容軒（琴洲）（画）、不詳（賛）

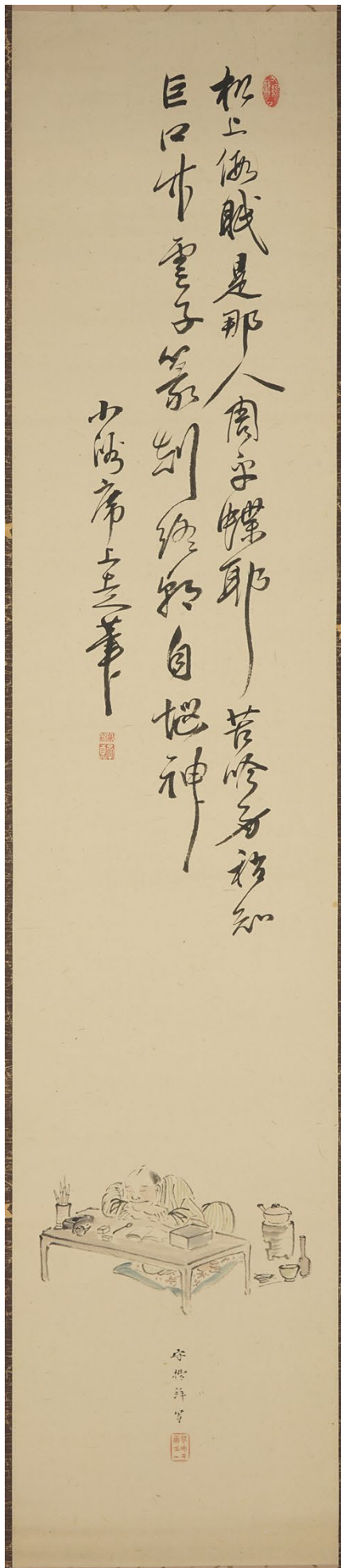
賛（詩文）を記した人については詳しくわかりませんが、詩を苦吟し篆刻をしているときに俄かに机の上で眠りこけてしまった状態を述べています。

琴洲の名前が読み取れる印章が添えられた画は、この賛の文の内容を軽妙な筆致で描写しています。

縦一三五・三cm×横二八・二cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。



部分



楼上月 河本延之（和歌、書）

河本公輔の長子で、父と同様に京都で生涯を過ごし、日本の古典文学を研究して国学者または歌人として知られた延之（号：可々楼）の和歌の書です。

和文を記すのにふさわしい、やわらかで流麗な筆遣いです。

縦一一三・九cm×横一八・八cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。

楼上月

ともし火はしばしといひてたかどのにのぼればのぼる夕月の影 延之

楼上月

ともし火はしばしといひてたかどのにのぼればのぼる夕月の影 延之

河本家の奉公書 河本容軒（書） 安政五年（一八五八）

藩主の代替わりの際などに、藩の武士は奉公書を提出します。これは主君に仕えてきた先祖以来の功績を年代順に書き出したもので、家臣としての履歴を登録する目的で作られる、封建制度においては大切な文書です。

しかし町人や農民でも、藩の重要な役職に就いた家では苗字帯刀が許され、形式上は武士身分に取り立てられるので、奉公書を提出します。

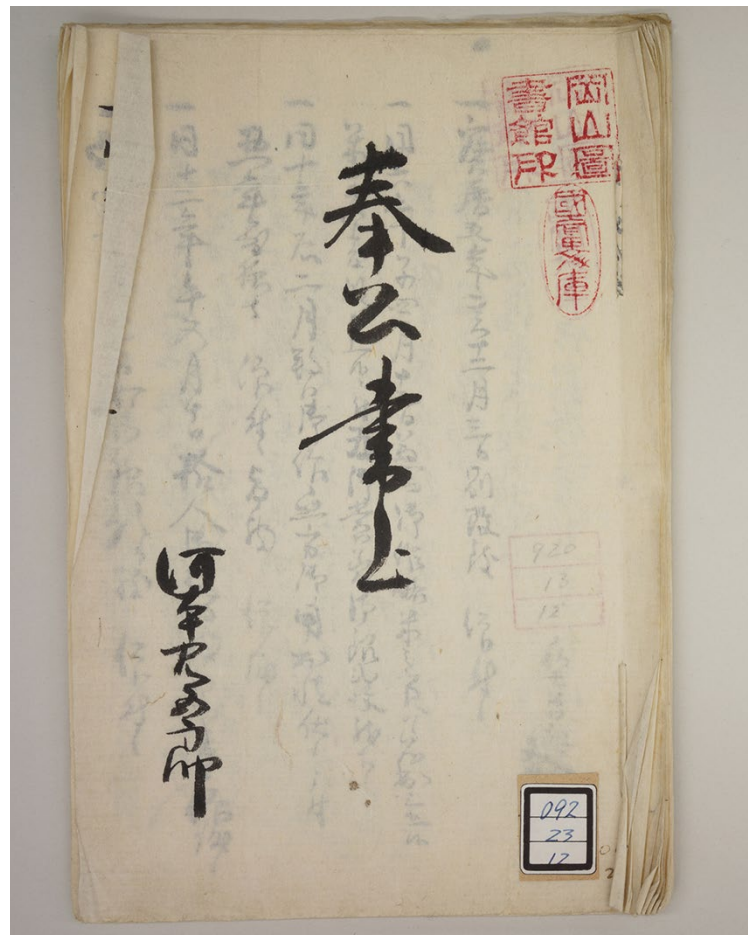
岡山城下の商人の奉公書は、岡山藩の文書を集めた「池田家文庫」（岡山大学附属図書館所蔵）にあるほか、幕末に惣年寄を務めた国富家の文書（当館蔵）にも下書きや惣年寄の控えかとみられるものがあり、ここではその中にある河本家のものを紹介します。

一般に武家の奉公書では、主君に対する功業として戦場での武勲に重点を置いて記述されますが、町人の奉公書では、藩へ多額の献金を行ったことがしばしば言及されます。そしてその論拠として、献納の際に藩と交わした証文の内容の写しが末尾にまとめ書き出されます。

国富家文書にある河本家の奉公書（表表紙を除き、本文全一三丁からなる）では、第二丁の裏面の冒頭に、安永四年に財政難の岡山藩が用達の商人一五名から借りていた銀を献上に代えることと引替えに、以後は毎年一〇〇貫目につき二〇〇俵の米を支給するとした約束のことが記されています。そしてこれの証文の写しが、末尾に近い第一一丁の裏面に記されています。

表紙に名前が記載されている河本忠五郎は、本文の末尾にある安政五年の年記から、幕末に惣年寄を務めた容軒（琴洲）のことで、この奉公書はその頃に彼が惣年寄の国富源次郎へ控えとして渡したものかと思われます。このほかに池田家文庫にも河本又七郎（黙軒）が明治三年に岡山藩へ提出した奉公書があり、それには安政五年以降の事項が書き加えられています。

縦二四・五cm×横一六・七cm。国富文庫〇九二・二三／一二。



表紙「奉公書上」

清桂坊 湯煥章 萬字 萬字 仁

少卿書

岡山藩への献納金の証文 安永四年（二七七五）

さきの奉公書に記されている安永四年（一七七五）の献金については、岡山藩の役人から渡された証文の実物が保存されています。

このときは一五名の用達商人から藩へ合計七〇〇貫目の銀が借り上げられました。が、どうやら藩ではそれが返済できなくなったとみて、商人からの申し出のような形をとった献納（指上げ）に代えられるとともに、それと引替えに藩からは商人たちへ、一〇〇貫目ごとに毎年二〇〇俵の米を支給することが約束されました。

河本家では、その中の一五〇貫目を負担したのですが、証文の宛名の「又七郎」は河本家では代々の当主が名乗ってきた通称であり、この年に当主になっていたのは伺居（一阿）です。

この金額を現在の貨幣価値へ換算することは大変難しく、かなり乱暴な説明をしなければなりません。金一両がさまざまな物品の物価換算で数万円から数十万円までの幅が見込まれますが、これを米一石（一八〇キログラム）の値段に相当するとして仮に一五万円程度とした場合、一両が銀六〇匁の相場として、一貫目（銀二〇〇〇匁）は約二五〇万円となり、一五〇貫目ならおよそ三億七〇〇〇万円あまりです。

この証文の中で河本家の人は商人であるため、苗字ではなく屋号（灰屋）を右肩付きにして記されています。そして岡山藩から署名しているのは、藩の会計事務（出納）をつかさどる「判形」（はんぎょう）という役職を勤めていた三名の武士（梶浦勘助、小崎半兵衛、森半左衛門）で、さらに証文の裏面に仕置職を勤めていた家老のひとり、池田大和が署名をしています。

（証文）縦四〇・七cm、横五五・三cm。（包紙）縦四四・五cm、横八・二cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。

翻刻と読み下し

（包紙の表書）

証文

灰屋

又七郎

（証文の表書）

覚

合銀百五拾貫目

右者御用達拾五人を兼而御借上

銀千七百貫目此度乍恐指上申度

内願之通達

御聴奇特成儀依之元銀百貫目二付

米式百俵宛永々被下置之旨被

仰出候間可被相受者也

覚え

合わせて銀百五拾貫目

右は御用達拾五人より兼ねて御借り上げ

銀千七百貫目このたび恐れながら指上げ申したき

内願の通り御聴に達し

奇特なる儀これにより元銀百貫目につき

米式百俵あて永々下され置くの旨

仰せ出され候あいだ相受けらるべきものなり

梶浦勘助

（印、花押）

安永四乙未歳二月

江戸詰二付無判

小崎半兵衛

森半左衛門

（印、花押）

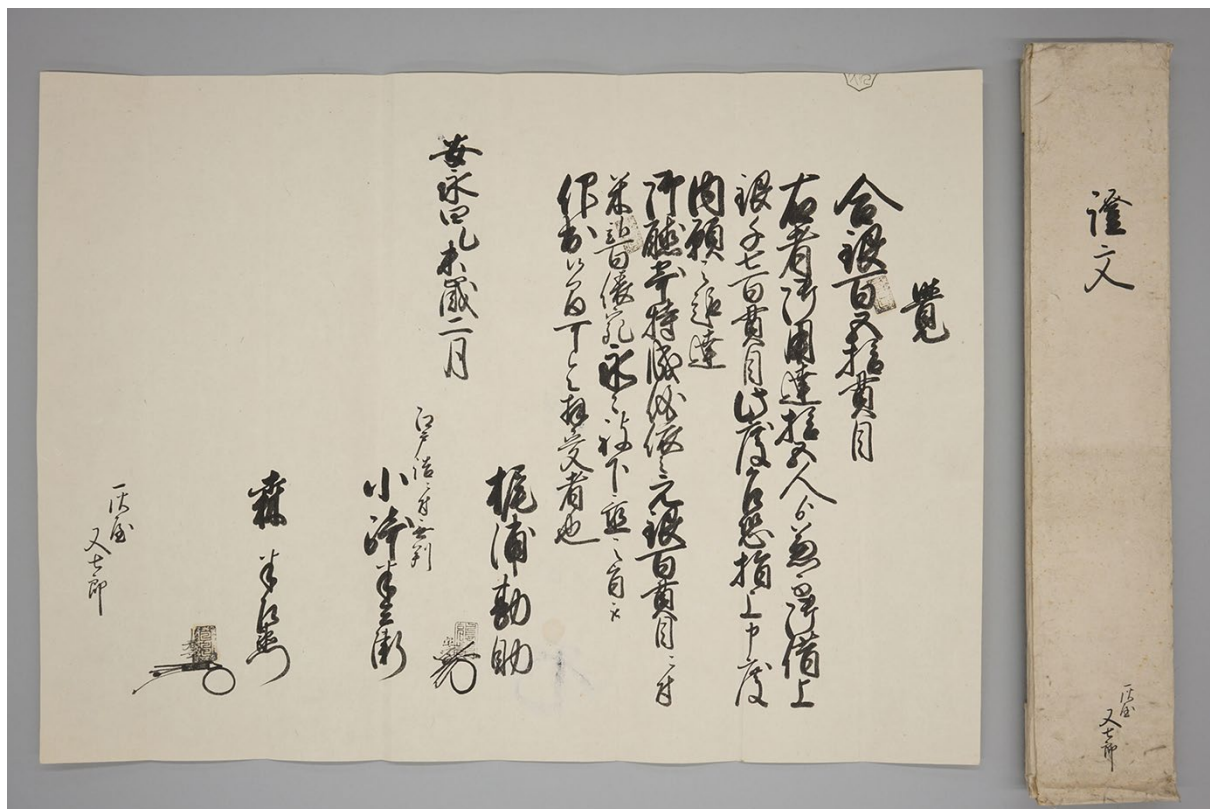
灰屋

又七郎

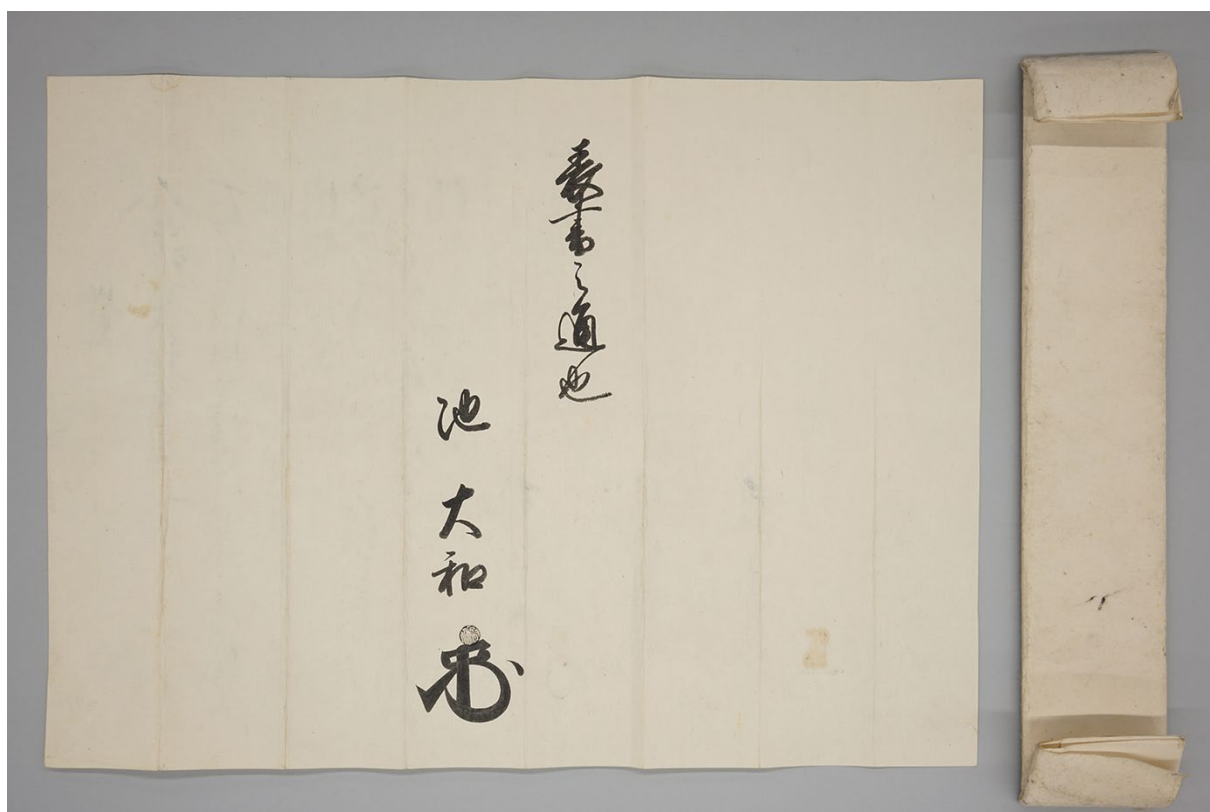
（証文の裏書）

表書之通也

池 大和（印、花押）



(表面)



(裏面)

河本侗居（一阿居士）の施入への受取状

河本侗居（一阿）は仏教に深く帰依し、晩年には禪宗を慕って宝福寺（総社市）へ入山したと伝わります。この文書は「覚（おぼえ）」とありますが、寛政元年（一七八九）に侗居が寺の法会のために金一〇両を施入（寄付）したことを証するため、寺が発行した受取状です。

文面は「金子拾両 右は楞伽会の施入として、たしかに収納すること件（くだん）のごとし」というほどの意味です。

なお、楞伽（りやうが）とはセイロン島にある山の名で、「楞伽経」の説かれたところといわれ（角川書店『新字源』による）、それを読誦する法会のための費用を一阿が寄付したということです。

縦二九・三cm、横二二・二cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。

翻刻と読み下し

覚

一金子拾両

右者為楞伽會施入憶收

納如件

寛政元酉十二月三日 井山寶福寺

納所（印記）

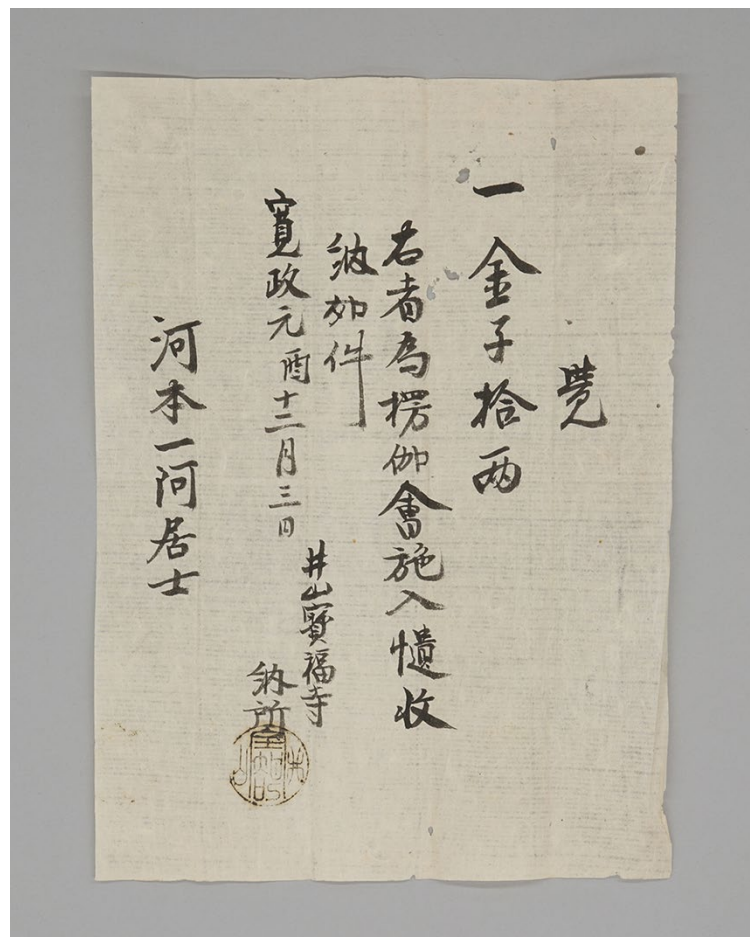
河本一阿居士

覚

一（ひとつ）金子拾両

右は楞伽會施入としてたしかに収納

すること件（くだん）のごとし



松平定信の尽力で再建された寛政度の御所は、幕末の嘉永年間にまた焼失してしま
い、安政二年（一八五五）に再建されたのが現在の京都御所の建物です。

この安政度の御所造営工事において屏風、襖、衝立、杉戸絵などの装飾画を受け持った画家たちの名前と評判を、相撲の番付に倣って書き出した一覧表が河本家に伝わっていて、その包み紙には安政三年に竹屋呂介という人から借覧し、書き写させてもらったことが記されています。河本家が京都の絵師の動向と評価に注意を払っていたことがわかる資料です。

「絵所預」を務めた土佐派の画家は行司の位置にあつて別格扱いですが、それ以外の画家の中では琴洲の師の中島来章の名前が上段にあつて、「唐子遊び」の画を描いており、かなり高い地位にあることがわかります。

（本紙）縦三二・四cm、横三・九cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。

包紙の表書の翻刻と読み下し

内裏造営二付御用相勤候画工

名前評判記安政三年丙辰

五月六日竹屋呂介ヨリ借寫

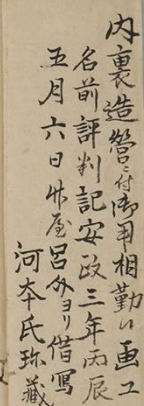
河本氏珍藏

内裏造営につき御用あい勤め候（そうろう）画工

名前評判記 安政三年丙（ひのえ）辰

五月六日 竹屋呂介ヨリ借写

河本氏珮(ちん)蔵



中島来章から河本琴洲へあてた文書

漢字の判読が難しい箇所もありますが、河本琴洲から紹介された人のために中島来章が鹿の絵（絹本直幅著色渡鹿図）を制作したところ、代金三〇〇匹を直ちに受領したので、そのことを発注者へ知らせ御礼を伝えるようにと、来章が琴洲へ依頼している内容かとみられます。

月日は書かれていますが、いつの年のことかは記されていません。

金一兩〓四分〓四〇〇匹（疋）として、このときの掛軸一幅（ただし絹本で着色）の代金は四分の三両になり、米一石（一人が一年間に消費する米の量）をおおよそ一両とすれば、その九ヶ月分に相当します。

縦一七・二cm、横二六・七cm。岡長平氏旧蔵・石村雅子氏寄贈品。

翻刻と読み下し（試案）

証

一金 三百匹

右為絹本直幅

著色渡鹿図潤筆

御直投（？）被下辱謹領仕候

猶宜御先方江御禮（？）

被仰上下度候

頓首

七月廿日 中島来章（印記）「匪福堂」

河本琴洲君

御紹介

証

一金 三百匹

右絹本直幅

著色渡鹿図潤筆

御直投（？）下され謹領を辱めつかまつり候

なお宜しく先方へ御礼（？）

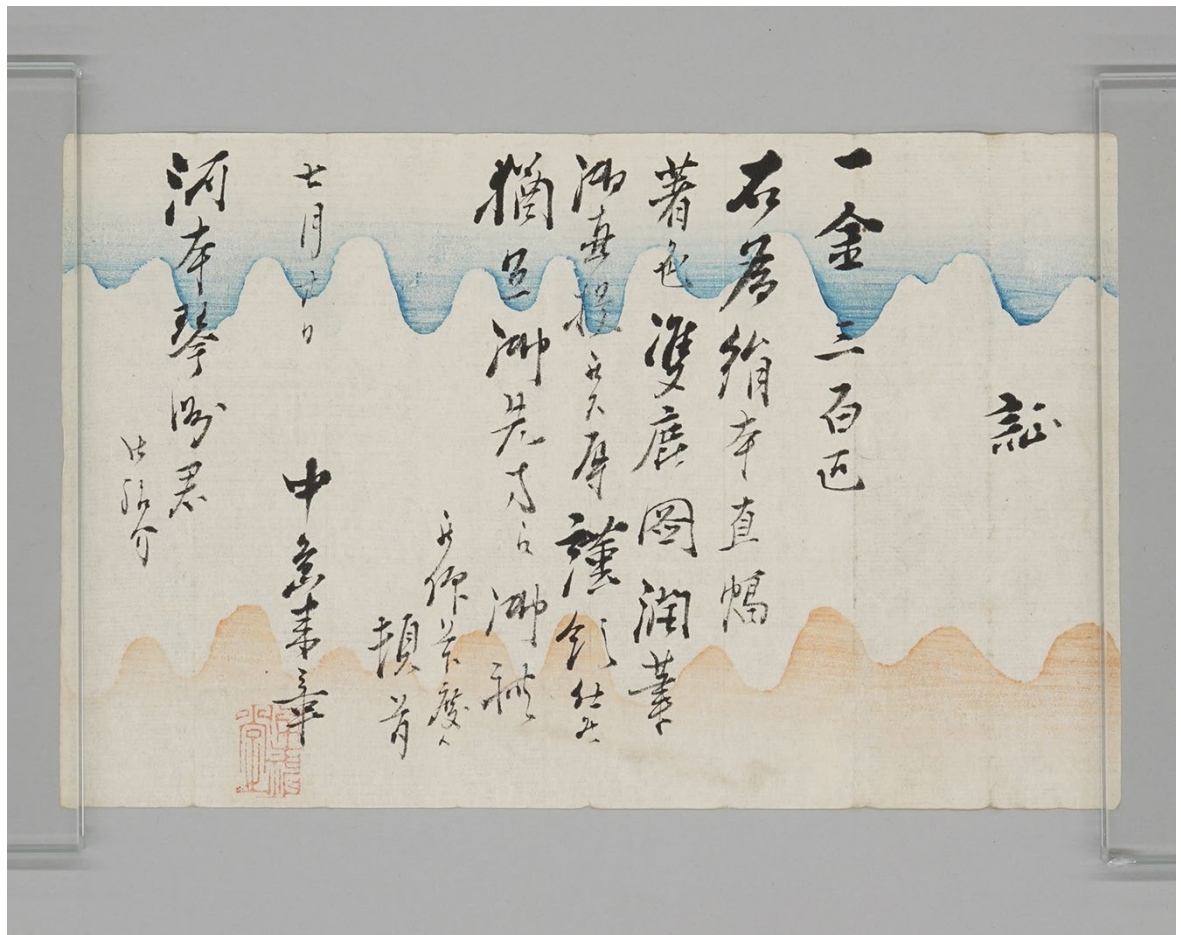
上下仰せられたく候

頓首

七月廿日 中島来章

河本琴洲君

御紹介



参考文献

- 三宅会(河本公輔)『家録秘抄』寛政一〇年、岡山市立中央図書館 河本文庫〇九二・一一／一。
 岡山県立図書館(編)『延宝―宝暦―文化時代 岡山地方図書館蔵書目録 岡山藩校文庫、
 閑谷贅文庫、経誼堂(岡山河本一阿氏設立)』(発行年不詳)。
 渡辺知水『網浜平井山墓調査 上 碑文の部 上生院付近』一九五九年(手稿)。
 妹尾袈(編著)『備前岡山人名彙海』一九三三年、備前岡山人名彙海刊行会。
 岡山市史編集委員会(編)『岡山市史』巻五、一九三八年、岡山市役所(分担：妹尾袈、小林
 久磨雄、入江勝胤)。
 岡山市史編集委員会(編)『岡山市史(人物編)』一九六八年、岡山市役所(分担：吉岡三平、
 岡崎誠、巖津政右衛門)。
 吉岡三平(監修)、岡山人名事典刊行会(編)『岡山人名事典』一九七八年、日本文教出版。
 岡山県歴史人物事典編集委員会(編)『岡山歴史人物事典』一九九四年、山陽新聞社。
 岡長平「河本一阿と立軒」『古美術』第二巻第一号、一九五〇、古美術出版社、七〇～七六頁。
 原田伴彦「近世岡山町人と茶湯 河本家と国富家など」『淡交』第二九九号(第二五巻第
 一二号)、一九七一年、淡交社、四〇～四九頁。
 片山新助『近世岡山町人の研究』一九八四年、楓亭文庫(巻末には池田家文庫所蔵の河本家
 奉公書の翻刻も掲載されている)。
 片山新助『岡山の町人』(岡山文庫「一一七」)一九八五年、日本文教出版社。
 黒崎義博『岡山の図書館 ―岡山文化と図書館―』(岡山文庫「一五四」)一九九一年、日本
 文教出版社。
 岡山県立博物館(編集・発行)『平成一〇年度特別展 歴史を彩る人々 ―近世岡山の文化―』
 一九九八年(五二～五三頁に「河本立軒」)。
 五十嵐公二、武田庸二郎、江口恒明『天皇の美術史5 朝廷権威の復興と京都画壇 江戸時
 代後期』二〇一七年、吉川弘文館。
 川見典久『集古十種稿』の分析からみる『集古十種』完成までの過程『古文化研究』第一七号、
 二〇一八年、黒川古文化研究所、一～五四頁。
 木村光徳『日本陽明学派の研究 ―藤樹学派の思想とその資料』一九八六年、明德出版社(二三
 ～二五頁、および五九五～五九七頁で淵岡山の京都祠堂について記載)。
 長島愛生園入園者自治会(著作兼発行)『隔絶の里路 ―長島愛生園入園者五十年史―』

一九八二年、二八〇～二八二頁(忘れえぬ人々)から「河本太仁治 戦後の愛生座を指導」。
 柳沢秀行「キリスト教プロテスタント派人脈と洋画家 ―明治～昭和戦前期における岡山、
 倉敷市域における活動の軌跡―」『現代芸術研究』二(一九九八年、筑波大学芸術系
 五十殿研究室)
 岡山県立美術館(編)『岡山ゆかりの地獄草紙と餓鬼草紙』二〇一三年、「極楽へのいざない
 ―練り供養をめぐる美術―」岡山展実行委員会(発行)

岡山市立中央図書館 企画展

岡山城下の豪商 河本家の絵画

解説図録

発行日 二〇二五(令和七)年七月一四日

発行 岡山市立中央図書館 ©

執筆 飯島章仁(岡山市立中央図書館 主査学芸員)

※本書は電子版のみの発行です



岡山市立中央図書館